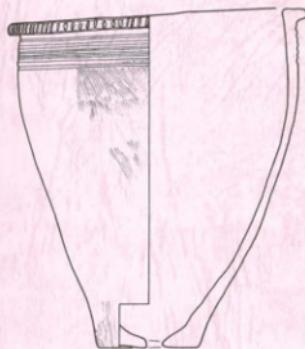


宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 多肥宮尻遺跡



2004年12月

高松市教育委員会  
株式会社 西日本住建

## 例　　言

1. 本報告書は、株式会社西日本住建が施工する宅地造成工事に伴う発掘調査報告書で、高松市多肥上町に所在する多肥宮尻遺跡（たひみやじりいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査地ならびに調査期間は次の通りである。

調査地：高松市多肥上町 1400 番地ほか  
発掘調査：平成 16 年 7 月 5 日～平成 16 年 7 月 16 日  
整理作業：平成 16 年 7 月 20 日～平成 16 年 9 月 30 日
3. 発掘調査及び整理作業は高松市教育委員会が担当し、その費用は株式会社西日本住建が全額負担した。
4. 発掘調査は高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員小川賢が担当し、末光甲正（讃岐文化遺産研究会）がこれを補佐し、整理作業は同専門員川畠聰と小川が担当した。
5. 本報告書の執筆・編集は、小川の助言を得て川畠が行った。
6. 発掘調査から整理作業、報告書執筆を行うにあたって、下記の関係諸機関ならびに方々からご教示を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順、敬称略）

香川県教育委員会 大朝利和  
7. 押図として、高松市都市計画図 2 千 5 百分の 1 「太田」「林」を一部改変して使用した。  
8. 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は第 1・2・26 図が座標北を、それ以外は磁北を示す。  
9. 本書で用いる遺構の略号は次の通りである。

SB：掘立柱建物 SD：溝
10. 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

## 目　　次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査の経緯	2
第2節 調査と整理作業の経過	2
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法	7
第2節 調査地の概要と基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
第4章 まとめ	
第1節 遺構の変遷について	25
第2節 調査地周辺における弥生時代前期末～中期初頭の遺跡との関係	25

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査の経緯

株式会社西日本住建が計画する宅地造成工事に関し、予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会があった。高松市教育委員会では工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である日暮・松林遺跡および多肥宮尻遺跡の隣接地であることから、当該地に埋蔵文化財が包蔵されている可能性が考えられた。このため、株式会社西日本住建に対し、「現状では周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接していることから、遺跡が存在する可能性が極めて高く、工事着手後に遺跡が発見された場合は工事の進捗に多大な影響を及ぼす可能性もあるため、工事着手前に試掘確認調査を実施することが望ましい。」と説明を行い、任意協力ををお願いしたものである。

株式会社西日本住建と協議の結果、事前に試掘調査を実施することで合意した。宅地造成工事の内、宅地部分については盛土を行うことから地下道構に影響が無いが、道路部分については掘削を伴う地下道構に影響を及ぼす可能性が高く、また永久構造物となることから、道路部分を調査対象地とし、平成16年6月29・30日に試掘調査を実施した。6本のトレーナー調査の結果、第4～6トレーナーで弥生時代～中世にかけての遺構・遺物を確認することができた。高松市教育委員会は平成16年7月1日に香川県教育委員会に対し試掘確認調査結果を送付するとともに、造成工事の施工者である株式会社西日本住建から提出された埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法第57条2第1項）を進呈した。同日に、香川県教育委員会より、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について、発掘調査実施の旨の回答が高松市教育委員会にあり、株式会社西日本住建に伝達した。

これを受け、高松市教育委員会は株式会社西日本住建と試掘調査結果をもとに協議を行った結果、遺構の希薄な第4トレーナーおよび第6トレーナー東半を除く、第5～6トレーナー部分の約230m<sup>2</sup>について工事着手前に発掘調査を実施することで合意し、平成16年7月2日に埋蔵文化財調査協定書を締結した。業務名は「宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」とし、高松市教育委員会は発掘調査・整理作業の実務を行い、その費用負担および契約・支払事務については株式会社西日本住建が行うこととした。

## 第2節 調査と整理作業の経過

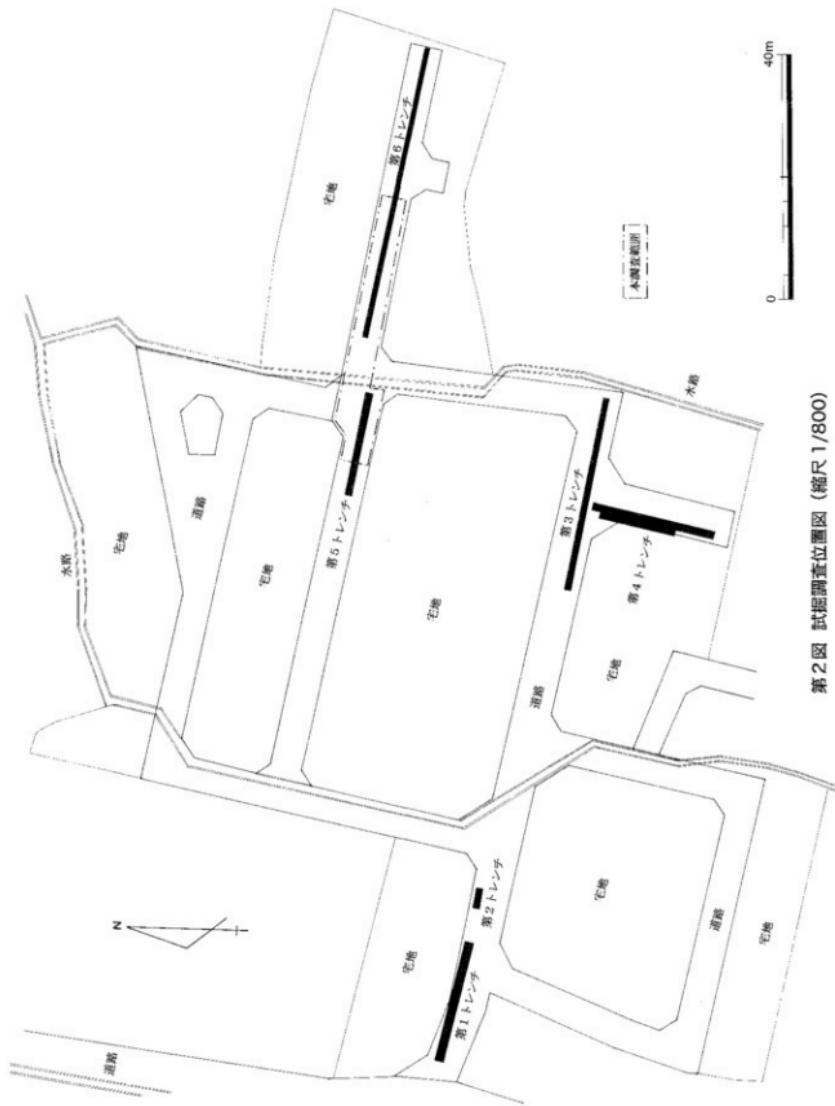
発掘調査は平成16年7月5日から開始した。幸いにも好天に恵まれ、7月16日に全体の調査が終了した。調査面積は、水路等の控えをとったことから205m<sup>2</sup>となった。

整理作業は平成16年7月20日から実施し、8月31日に整理作業の大半は終了した。その後、報告書執筆を行った。



第1図 調査地及び周辺遺跡位置図（下段：縮尺 1/5,000）  
(宮西・一角遺跡と空港跡地遺跡は第26図を参照)

第2図 試掘調査位置図(縮尺1/800)



## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野が広がっている。南部に讃岐山脈の北縁がかかり、東部に屋島、立石山塊、南西部に石清尾山、淨願寺山、白峰、堂山の山系が連なる。いずれも讃岐山脈の基盤である洪積台地と同じ地層からなるメサ、あるいはビュート型の溶岩台地で、20～300mの低い山地である。北方はひらけ、瀬戸内海に面し、男木島、女木島、大槌島、小槌島などの島をも市域に含み、備讃瀬戸を挟んで岡山県と対峙する。

高松平野は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。高松平野には、西から本津川、香東川、御坊川、詮田川、春日川、新川といった河川が北流しているが、なかでも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており、現存の春日川以西が香東川による沖積平野といわれている。現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は17世紀初めの河川改修によるもので、それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐した後、石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の庵川直前の流路は、御坊川として今でもその名残りをとどめている。

高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野での流入口で穏やかな傾斜を持つ扇状地形の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壤をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し、表層は澀れ川になることが多く、早くからため池を造築して水不足を解消してきた。山間の洪積台地と洪積層の境目に多くのため池が分布する。これらのため池は、年間1,000mm前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。また、今回の調査地である多肥地区周辺は、ため池に加えて出水（ですい）と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と緻密な水利慣行を伝えてきた。調査地周辺では、栗木出水、平井出水、錦木出水等が見られる。しかし、昭和50年の香川用水の通水によって、一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水の確保の不安が払拭された反面、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

### 第2節 歴史的環境

高松平野では、ここ10数年間の大規模な開発事業（高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等）の事前調査により、遺跡数が飛躍的に増大してきた。特に、今回の調査地の多肥上町周辺においては、香川県立高松桜井高等学校や都市計画道路の建設等に伴う発掘調査が行われ、面的に遺跡の広がりや内容が判明している地域である。高松平野の歴史的環境は他の報告書に譲ることとし、ここでは周辺の調査について述べる。

旧石器・縄文時代の遺跡は、今回の調査地周辺では遺跡は知られていない。松林遺跡や多肥松林遺跡の旧河道中からわずかに縄文時代晚期の遺物が出土している程度である。当該期の遺跡は高松平野全体でもほとんど知られておらず、不明な点が多い。

弥生時代前期になると、多肥松林遺跡で溝が検出されているほか、松林遺跡では集石遺構が見られる。弘福寺領田岡調査F区では、前期末～中期初頭の溝が確認されている。さらに宮西・一角遺跡と空港跡地遺跡A区では、前期末～中期初頭の土坑が多数発掘されており、集落が存在した可能性がある。中期中葉になると、香川県立高松桜井高等学校の中心部を南から北へ流れる自然河道が埋没を始めている。この流路から土器とともに、鳥形木製品、木製農具等が出土している。流路の両岸には掘立柱建物や竪穴住居が営まれており、特に流路東側の集落域は日暮・松林遺跡まで広がっている。こ

の時期には多肥松林遺跡の北西部において洪れ砂層、松林遺跡において地震の液状化現象である噴礫が認められ、自然災害があったことを物語っている。中期後半～後期前半には遺構・遺物ともほとんど見られない。後期後半には日暮・松林遺跡において竪穴住居が多数検出されている。

弥生時代後期中葉以降には、灌漑水路が多数掘削されている。また、日暮・松林遺跡や多肥宮尻遺跡においては古墳時代中期～後期前半の土器や木製品を包含する自然河道が検出されている。松林遺跡でも後期の溝が確認されている。空港跡地遺跡A区では、弥生時代後期～古墳時代前期の前方後方形および前方後円形の周溝墓が確認されており注目されている。

つづく古墳時代中期以降では、空港跡地遺跡A区で中期の竪穴住居が確認されており、集落が存在している。

平安時代には周辺の自然河道の埋没がほぼ完了しており、多肥松林遺跡において掘立柱建物や溝が掘削されており、溝からは斎車が多量に出土している。

中・近世においては条里地割の溝や掘立柱建物が検出されている。特に松林遺跡では香川郡の一条と二条の境界溝が検出されている。日暮・松林遺跡においては多量の瓦器軸が出土している。また、宮西・一角遺跡では室町時代の屋敷地の区画溝と墓が検出されている。

#### 周辺の調査歴（～2004.9.30）

遺跡名（調査原因）	調査期間	面積	調査機関	文献
松林遺跡（通学路整備）	1995.5.19～1995.11.8	1,000 m <sup>2</sup>	高松市教育委員会	1
松林遺跡（宅地造成）	2004.4.1～2004.4.12	800 m <sup>2</sup>	高松市教育委員会	2
多肥松林遺跡（高等学校建設）	1993.4.26～1994.9.6	17,600 m <sup>2</sup>	香川県埋蔵文センター	3
多肥松林遺跡（土木事務所建設）	1994.10.1～1995.3.31	5,900 m <sup>2</sup>	香川県埋蔵文センター	4
多肥松林遺跡（都市計画道路建設）	1997.4.1～1997.12.31	7,000 m <sup>2</sup>	香川県埋蔵文センター	5
日暮・松林遺跡（都市計画道路建設）	1993.11.15～1995.9.29	11,600 m <sup>2</sup>	高松市教育委員会	6
日暮・松林遺跡（病院建設）	2002.5.12～2002.7.31	2,200 m <sup>2</sup>	高松市教育委員会	7
日暮・松林遺跡（農道整備）	2004.5.12	70 m <sup>2</sup>	高松市教育委員会	未刊
日暮・松林遺跡（特養老人ホーム建設）	2004.6.23～2004.8.27	1,500 m <sup>2</sup>	高松市教育委員会	未刊
多肥宮尻遺跡（都市計画道路建設）	1997.4.1～1999.9.30	12,245 m <sup>2</sup>	香川県埋蔵文センター	8～10
多肥宮尻遺跡（宅地造成）	2004.7.5～2004.7.16	205 m <sup>2</sup>	高松市教育委員会	本書
讃岐国弘福寺領田岡金F区	1997.12.8～1998.3.31	1,000 m <sup>2</sup>	高松市教育委員会	11
宮西・一角遺跡（市道整備）	1995.1.31～2000.5.16	1,528 m <sup>2</sup>	高松市教育委員会	12～13
空港跡地遺跡A区（空港跡地整備）	1991.4.1～1993.6.30	12,200 m <sup>2</sup>	香川県埋蔵文センター	14

※「香川県埋蔵文センター」は「財団法人香川県埋蔵文化財調査センター」の略

#### 既存報告書（報告書が刊行されているものは、報告書のみを掲載した。）

##### 松林遺跡

1. 「香川県立高松井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林遺跡」高松市教育委員会 1996
2. 「宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林遺跡」高松市教育委員会 2004

##### 多肥松林遺跡

3. 「高松新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1号 多肥松林遺跡」(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1999
4. 「高松市本事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥松林遺跡」香川県教育委員会 1995
5. 「多肥松林遺跡」県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概要 平成9年度。(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1998

##### 日暮・松林遺跡

6. 「都市計画道路福岡四丁目上原塚建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 日暮・松林遺跡」高松市教育委員会 1997
7. 「香川県済生会病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡(済生会)」高松市教育委員会 2003

##### 多肥宮尻遺跡

8. 「多肥宮尻遺跡」県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概要 平成9年度。(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1998
9. 「多肥宮尻遺跡」県道開通埋蔵文化財発掘調査概要 平成10年度。(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1999
10. 「多肥宮尻遺跡」県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概要 平成11年度。(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 2000

##### 讃岐国弘福寺領田岡調査

11. 「讃岐国弘福寺領田岡の調査Ⅱ」高松市教育委員会 1999

##### 宮西・一角遺跡

12. 「市道町47号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 宮西・一角遺跡」高松市教育委員会 2000
13. 「市道町47号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第2回 宮西・一角遺跡」高松市教育委員会 2001

##### 空港跡地遺跡（A区）

14. 「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5回 空港跡地遺跡V」(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 2002

# 第3章 調査の成果

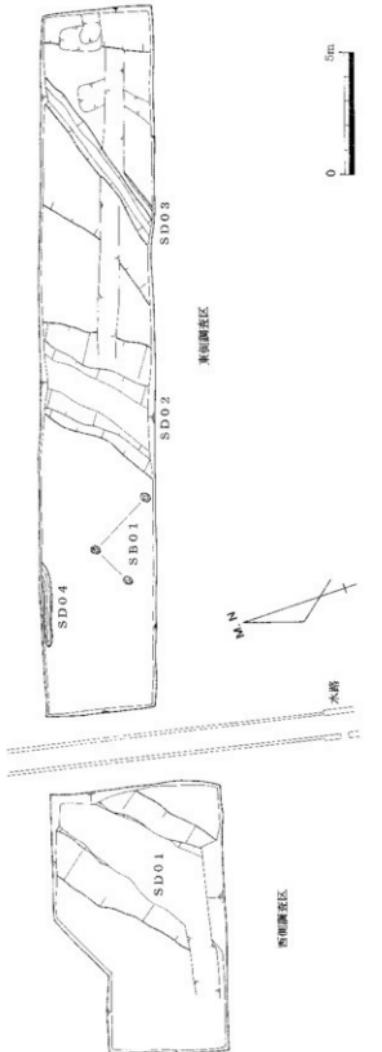
## 第1節 調査の方法

調査地は、宅地造成予定地の中央付近に位置し、水路を挟んで東西方向に長い調査区となった。調査区は、幅約4.8mで一部約7mと広く、全長は約43mを測り、水路部分を除いた調査面積は約205m<sup>2</sup>になった。調査の方法は、最初に地山面まで重機により掘り下げ、遺構検出にあたった。その後、順次遺構の掘削を行った。測量は平板測量による1/20図化を基本としたが、遺物の出土状況図、土層図等は適宜平板または手書きによる1/10図化または1/20図化を行った。

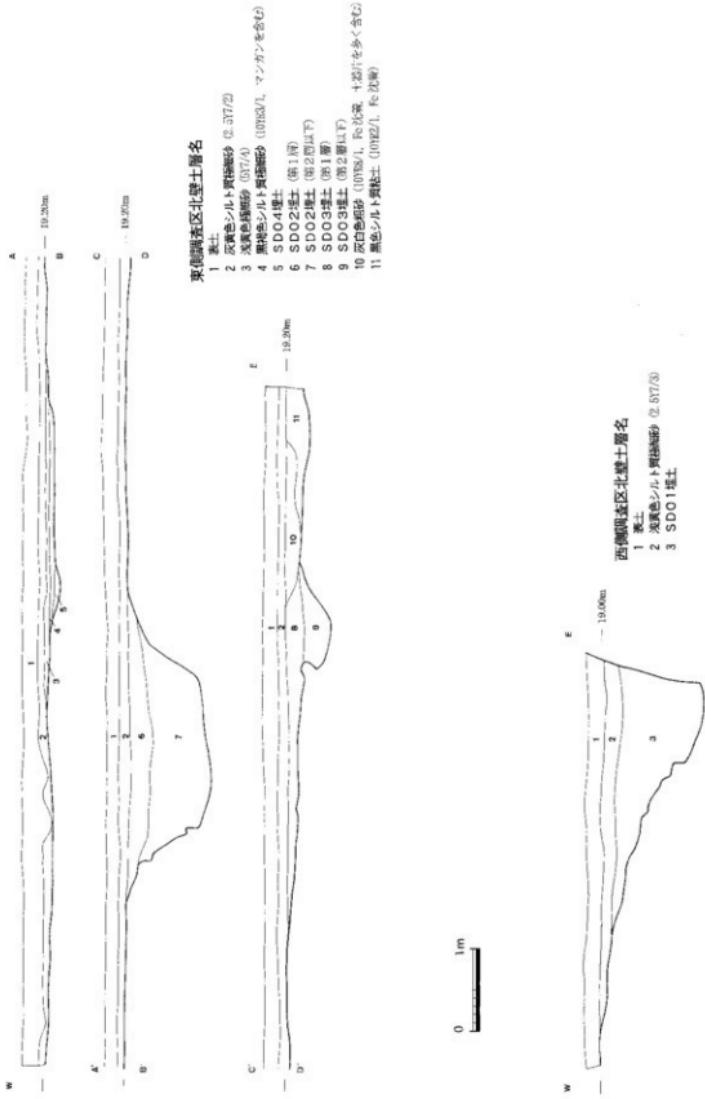
## 第2節 調査地の概要と基本層序

当該地の調査前の状況は、周辺の水田より一段高い平坦な原野であり、標高は水路より東側は約19.45m、西側は約19.2mを測る。掘削で明らかになった遺構面の標高は、東側東端で約18.9m、同西端で約19.2m、西側で約19mを測り、東側調査地西半分がもっとも高く、東西に向かって緩やかに下がる地形である。試掘調査の結果と合わせると、調査区東端から始まる深さ約30cmの低地は、宅地造成予定地東端まで続き、弥生後期の上器片が散在する包含層となっている。

土層図は調査区北壁において作成した。堆積土層は、第1層として厚さ約20cmの表土があり、第2層として厚さ5～20cmの灰青色または浅黄色のシルト質極細砂があり、その下に地山であるにぶい褐色極細砂～明黄褐色粘土層が存在する。遺構面は地山上面で1面確認した。検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟（柱穴3基）、溝4条である。出土遺物は弥生土器、須恵器、石器などコンテナ6箱分が出土した。なお、試掘調査の第4トレンチで検出した溝1条も、合わせて報告する。



第3図 遺構配置図（縮尺1/200）



### 第3節 遺構と遺物

#### S D O 1 (第5～8図)

西側調査区で検出した溝である（第5図）。幅4.5～4.7m、検出長7.0m、深さ90cmを測る。方位はN-48°-Eで、溝底の標高は南側で18.76mと北側で18.64mを測ることから、南西から北東に向かって緩やかに傾いている。埋土は5層に分層でき、断面形状はU字形を呈していたと考えられるが、調査では底の両壁が崩れてオーバーハングしている状態で確認した。第1層は、灰褐色シルト質極細砂で上層とした。第2・3層は褐灰色シルト質粘土で中層とした。第4層は灰黄色シルトおよび明オリーブ灰色細砂のラミナ状堆積で、第5層は灰黄色砂礫で下層とした。第4・5層が溝の使用時期、第1～3層が溝の埋没時期の堆積と推定される。

遺物は主に下層から出土したが、上・中層からも若干出土している。上層出土遺物は、第6図のとおりである。1は弥生土器壺の頸部片で、削出突带上にヘラ描沈線文が5条以上施されており、弥生時代前期末のものである。2は須恵器蓋の口縁部片、3は須恵器杯の底部片で、奈良時代のものである。

中層出土遺物で図化できたのは第7図の1点のみである。4は須恵器壺の口縁部片である。

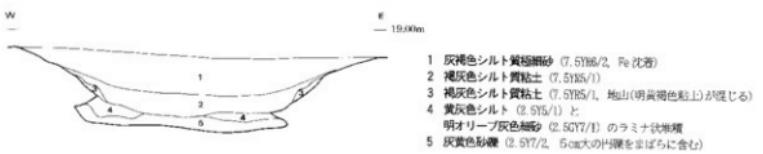
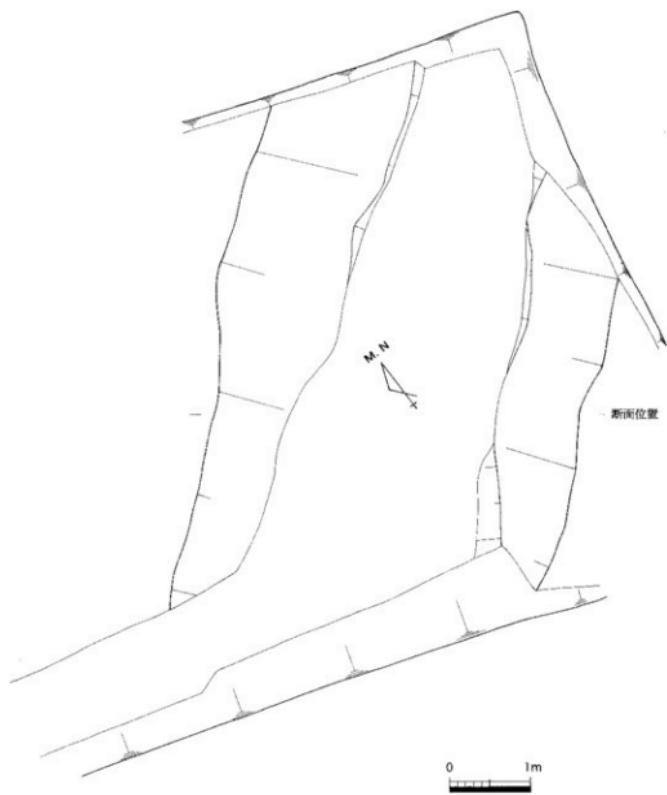
下層出土遺物は、第8図のとおり弥生土器または石器が見られる。5は壺の口縁へ頸部片で、削出突带上にヘラ描沈線文が2条施されている。6・7は壺の体部片で、4条のヘラ描沈線文に挟まれて2重線の山形文が施されている。8・9も壺の体部片で、8条または14条のヘラ描沈線文が施されている。10～16は壺または甕の底部片である。10は底面に円孔が穿たれており、額である。14は外面に刷毛目が残る。これら5～16は、弥生時代前期末のものである。17は甕の口縁部片で、凹線3条が施されている。18は高杯の杯部片である。19は底部で、内面にヘラケズリ調整が残る。これら17～19は弥生時代後期のものである。20は砥石と考えられ、表面が平滑になっている。21・22は打製石器の石鏽で、21は平基式、22は凹基式である。23は打製石器の刃器である。これら20～23の石器は、弥生時代のものである。

遺物から見たSD01の所属時期については、下層から弥生時代後期の上器が少数ながら出土しており、開掘の時期が後期である可能性がある。一方、同じ下層から前期末の土器が高い比率で出土し、さらに後述する前期のSD02・03とSD01が同じ方向を示していることから、SD01も前期末まで開掘の時期が遡る可能性がある。上・中層からは、奈良時代の須恵器が出土していることから、溝の最終埋没時期は奈良時代と考えられる。

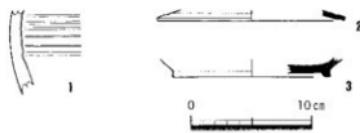
#### S D O 2 (第9～17図)

東側調査区中央で検出した溝である（第11図）。幅3.7～4.3m、検出長5.2m、深さ1mを測る。方位はN-42°-Eで、溝底の標高は南側で18.17m、中央で18.11m、北側で約18.15mを測り、傾きが明確でない。しかしながら、周辺の地形から判断すると、南西から北東に向かって緩やかに傾いていると想定される。埋土は7層に分層でき、断面形状は浅いU字形を呈している。第1層は、黒色シルト質粘土で上層としたもので、下層の弥生前期と違って弥生後期の土器片を含む。第2層は黒褐色シルト質極細砂で中層とした。第3層は黒褐色シルト、第4層は黒色シルトで、これらを下層とした。第5層は灰オリーブ色砂礫、第6層は灰黄色極細砂、第7層は黒褐色砂混シルトのラミナ状堆積で、これらを最下層（砂礫）とした。第5～7層が溝の使用時期、第2～4層が溝の埋没時期、第1層が最終埋没時期の堆積と推定される。また、上層から礫群が大量に投棄された状態で見つかっており（第9図）、これらは溝の最終埋没時に地面の安定化を図るために行われたと想定される。

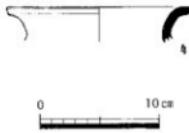
遺物は各十層から出土した。上層（第1層）出土遺物は、第10図のとおり弥生土器または石器が見られる。24～27は広口壺の口縁部または頸部片で、27には押圧文が見られる。ただし、26は長頸壺の可能性がある。28は直口壺の口縁部片である。29～32は甕の口縁部または体部片で、30の口縁端部には2条の凹線文が施されている。33・34は高杯の口縁部片で、どちらも端部を拡張させ、33の口縁端部には3条の凹線文が施されている。35は高杯の脚部片で、端部上部を肥厚させる。36は小形の器台である。37は鉢の口縁部片で、端部を拡張させる。38・39は製塙土器の脚部片である。



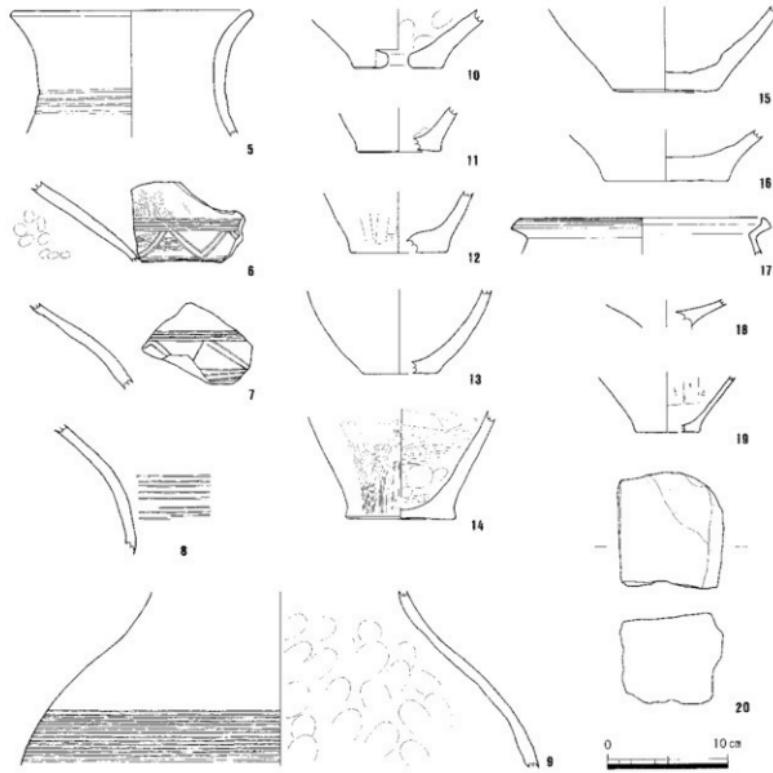
第5図 SDO1平面・断面図（縮尺1/60）



第6図 SD01上層出土遺物実測図（縮尺1/4）



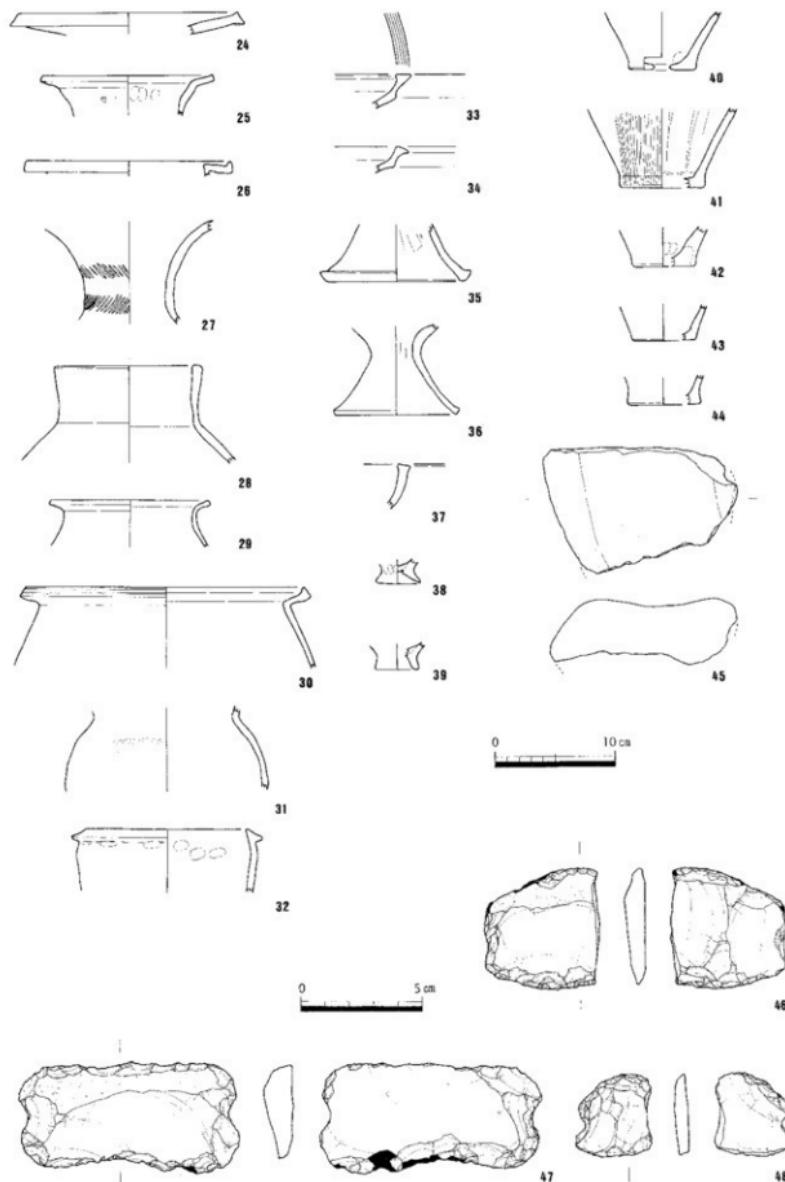
第7図 SD01中層出土  
遺物実測図（縮尺1/4）



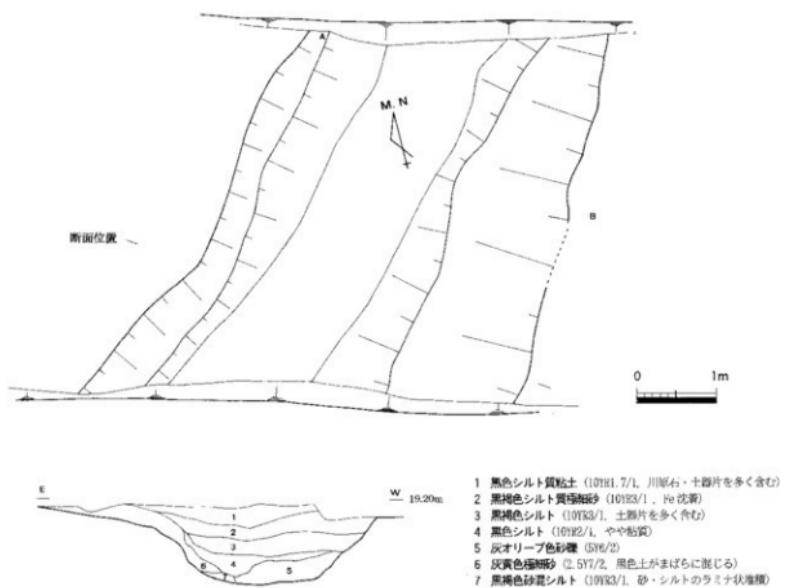
第8図 SD01下層出土遺物実測図（縮尺1/4, 21～23は1/2）



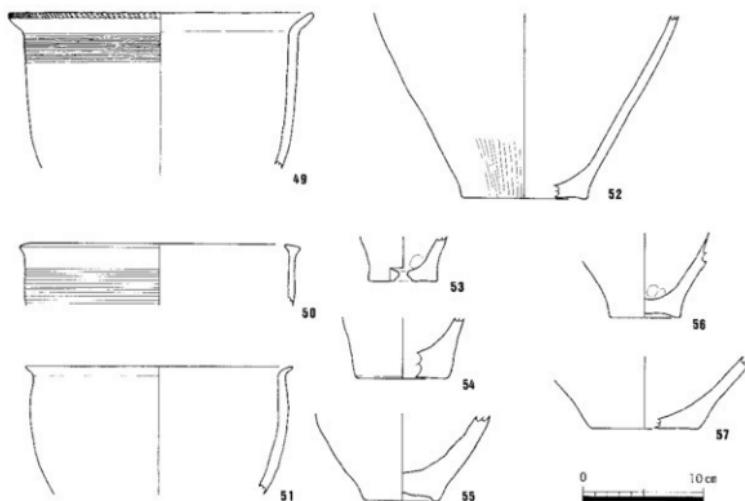
第9図 SDO 2上層疊群平面図（縮尺 1/20、図中のA・B地点は第11図のA・B地点と対応）



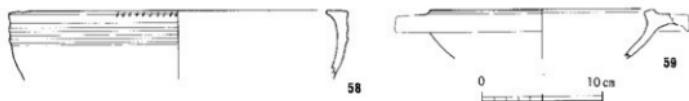
第10図 SD02上層出土遺物実測図（縮尺1/4, 46~48は1/2）



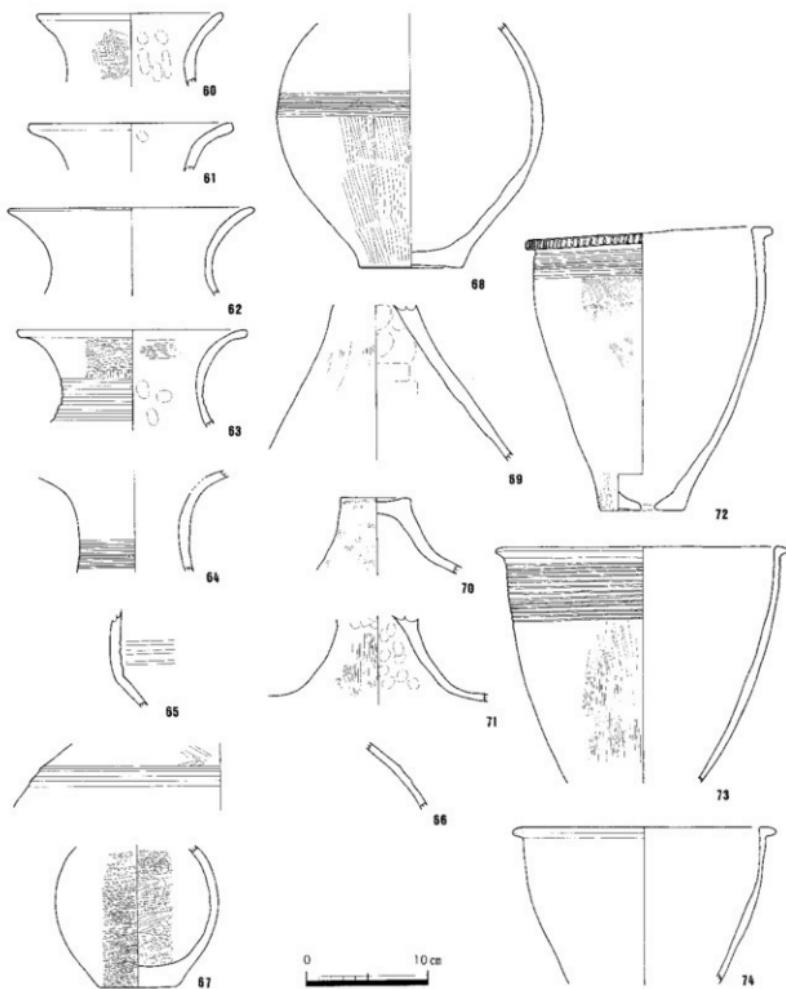
第11図 SD02平面・断面図 (縮尺1/60)



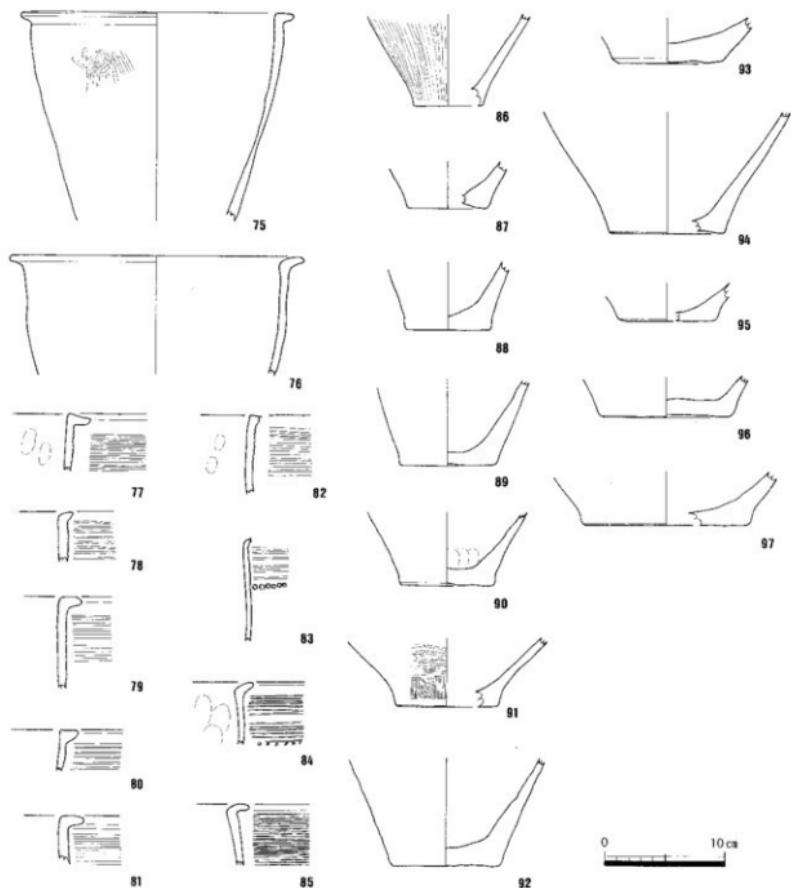
第12図 SD02中層出土遺物実測図① (縮尺1/4)



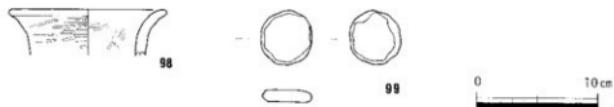
第13図 SD02中層出土遺物実測図②(縮尺1/4)



第14図 SD02下層出土遺物実測図①(縮尺1/4)

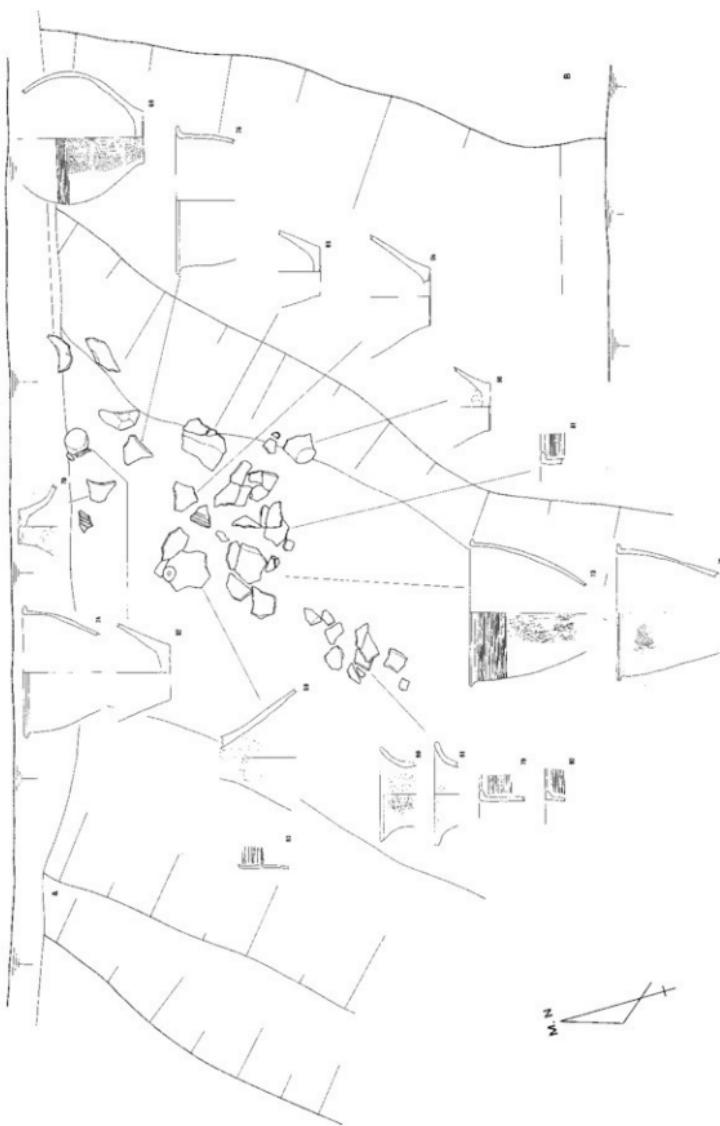


第15図 SD02下層出土遺物実測図②(縮尺1/4)



第16図 SD02最下層出土遺物実測図(縮尺1/4)

第17図 SD02下層遺物出土状況平面図 (縮尺1/20, 図中のA・B地点は第11図のA・B地点と対応)



40～44は底部片で、40は底面に円孔が穿たれており甌である。以上の24～44の弥生土器を概観すると、弥生時代後期前半のものが多く、一部後期末に下るものを見られる。45は砥石で、表面が平滑になっている。46～48は打製石器の石庖丁で、47はほぼ完存している。

中層（第2層）出土遺物は、第12・13図のとおり弥生土器が見られる。49～51は甌の口縁～体部片で、49・50は体部に8条または5条以上のヘラ描沈線文が認められるが、51は無文である。また、49の口縁端部には刻目文が施されている。52は甌の体～底部片で、外面にヘラミガキが残されている。53～57は底部片で、53は底面に円孔が穿たれており甌である。49～57は弥生時代前期末のものである。58は鉢の口縁部片で、外面に2条の凹線文が、内側に拡張させた口縁端部に刻目文が施されている。59は高杯の口縁部片で、いわゆる木製高杯を模倣したタイプである。58・59は弥生時代中期後葉のものである。

下層（第3・4層）出土遺物は、第14・15図のとおり弥生土器が見られる。60～63は壺の口縁部片で、63の頸部外面にはヘラ描沈線文が6条以上施されている。64・65は壺の頸部片で、64は8条、65は3条のヘラ描沈線文が施されている。66は壺の体部でも肩付近の破片で、2条の突帯文が施されている。67・68は壺の体～底部片で、68の最大径付近には6条のヘラ描沈線文が施されている。69～71は蓋の破片で、外面には刷毛目が残されている。72～85は強で、75・76は無文、これら以外は体部に沈線文が見られる。また、口縁部が如意状のものと逆し字の両者がある。72はほぼ完存しており、底面に円孔が穿たれており甌でもある。口縁端部に刻目文が、体部外面に6条のヘラ描沈線文が施され、外面には刷毛目が残る。73は体部外面に13条ものヘラ描沈線文が施されている。74は摩滅が著しく、沈線文が判別しづらい。77～83の体部外面にもヘラ描沈線文が施され、83には更に竹管文が施されている。84・85は、ヘラ描沈線文ではなく、柳描直線文が体部外面に施されている可能性があるもので、84には更に竹管文が施されている。86～97は底部片で、86の外面にはヘラミガキが、91の外面には刷毛目とヘラミガキが残されている。以上の60～91は、弥生時代前期末のものが多く、一部中期初頭にまで下るものを見られる。

最下層（第5～7層）出土遺物は、第16図のとおり弥生土器が見られる。98は壺の口縁部片であり、99は土器片を再利用した円盤である。これらは、弥生時代前期末のものである。

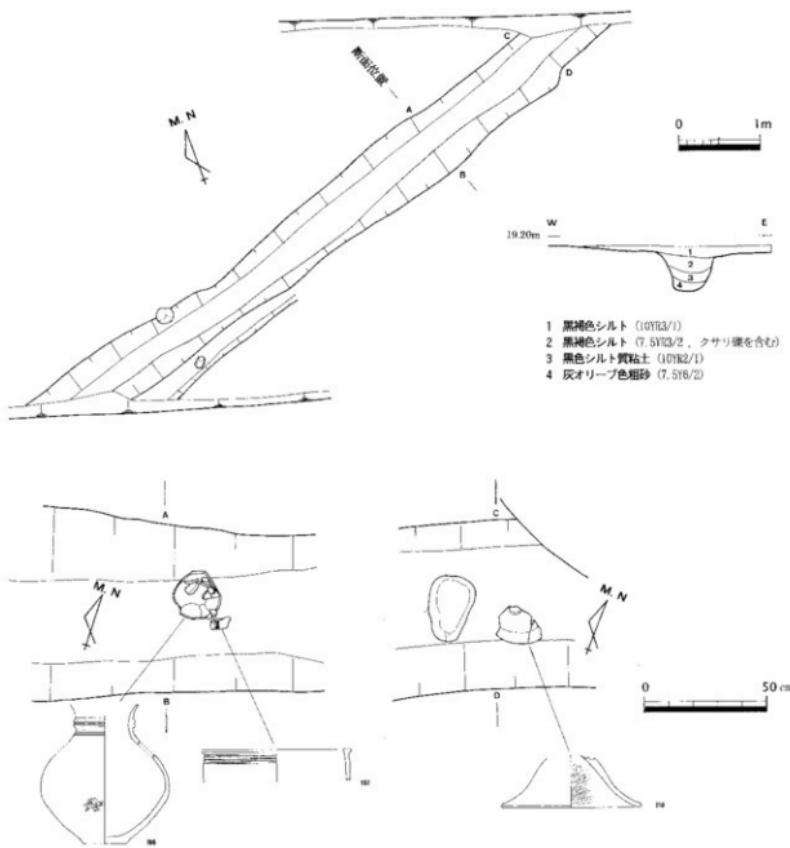
遺物から見たSD02の所属時期については、下層から弥生時代前期末～中期初頭の土器が大量に出土しており、開掘の時期が前期末と考えられる。最下層からも少数ながら前期末の土器が出土しており、矛盾しない。中層からは、弥生時代中期後葉の土器が前期末の上器に混じって出土しており、中期後葉には溝の埋没が進むとともに、付近に中期後葉の集落が存在していた可能性がある。上層からは、投棄された疊群とともに、弥生時代後期全般の上器が出土しており、溝の最終埋没時期は弥生時代後期末と考えられる。また、疊群の出土から、おそらく崖地であったSD02の跡地に後期の人々が疊を投棄して地面の安定化を図ったと考えられる。

### S D 0 3 (第18～22図)

東側調査区の東半分で検出した溝である（第18図）。幅0.8m、検出長7.6m、深さ55cmを測る。方位はN-73°-Eで、溝底の標高は南側で18.50m、北側で約18.59mを測り、北から南に傾いている。しかしながら、周辺の地形から判断すると、南西から北東に向かって緩やかに傾いている可能性がある。埋土は4層に分層でき、断面形状は逆台形を呈している。第1層は、黒褐色シルトで上層としたもので、下層の弥生前期と違って弥生後期の土器片を含む。第2層は黒褐色シルトだがクサリ疊を含み、第3層は黒色シルト質粘土、第4層は灰オリーブ色粗砂で、これらを下層とした。第4層が溝の使用時期、第2・3層が溝の埋没時期、第1層が最終埋没時期の堆積と推定される。

遺物は各層から出土した。また、ここではSD03上層を切っている調査区基本土層第10層（第4図上段）出土遺物についても合わせて報告する。基本上層第10層出土遺物は、第19図のとおり弥生土器で、100は長頸壺の口縁部、101は製塙土器の底部である。

上層出土遺物は、第20図のとおり弥生土器・石器が見られる。102は甌の口縁部片で、外面に7条のヘラ描沈線文が施される。103は鉢の口縁部片である。104は底部片である。105は打製石器で石庖丁または刃器の可能性がある。



第18図 SD03平面・断面図(縮尺1/60) 遺物出土状況図(縮尺1/20)

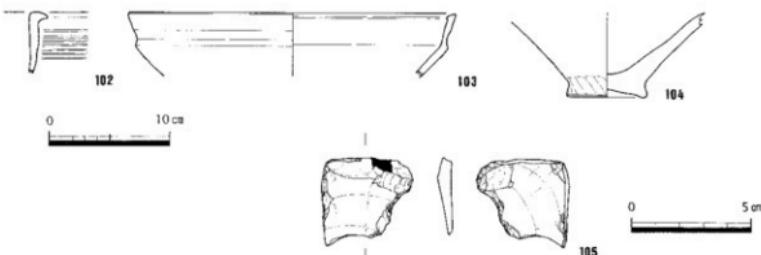
下層出土遺物のうち、第2・3層出土遺物は、第21図のとおり弥生土器が見られる。106は壺の頸部～底部にかけてで、頸部に貼付突帯文2条とヘラ描沈線文2条が施されている。107は甕の口縁部片で、外面上に5条のヘラ描沈線文が施されている。108・109は底部片である。

下層出土遺物のうち、第4層出土遺物は、第22図の1点のみである。110は弥生土器蓋の口縁部片で、内面にヘラミガキが残る。

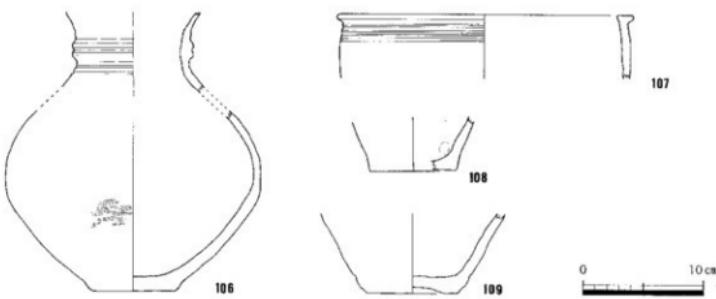
遺物から見たSD03の所属時期については、下層から弥生時代前期末の土器が出土しており、開掘の時期が前期末と考えられる。一方、上層からは弥生時代後期の土器が出土しており、溝の最終埋没時期は後期と考えられる。また、調査区基本上層第10層から出土している土器も弥生時代後期であり、SD03上層出土土器とほとんど時期差がないと考えられる。



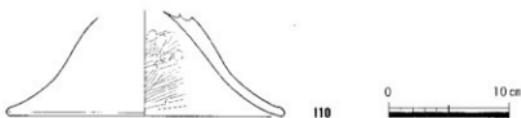
第19図 調査区基本土層第10層出土遺物実測図（縮尺1/4）



第20図 SD 03上層出土遺物実測図（縮尺1/4, 105は1/2）



第21図 SD 03下層（第2・3層）出土遺物実測図（縮尺1/4）



第22図 SD 03下層（第4層）出土遺物実測図（縮尺1/4）

#### S D 0 4 (第23図)

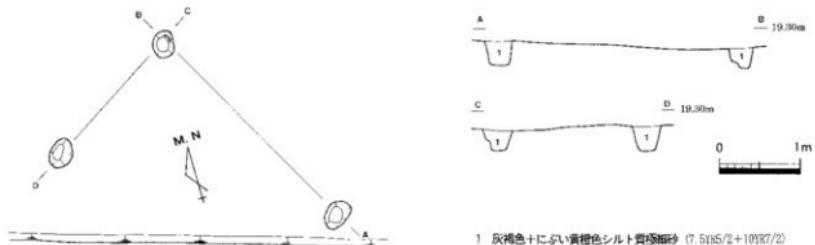
東側調査区の北東端で検出した溝である。幅0.3m、検出長3.5m、深さ10cmを測る。ほぼ東西方向だが、平面は弓状に湾曲している。溝底の標高は約19mを測る。埋土は灰白色～灰黄褐色シルト質極細砂の単層で、断面形状はU字形を呈している。出土遺物はない。

#### S B 0 1 (第24図)

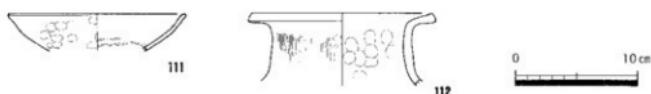
東側調査区南西で検出した掘立柱建物跡である。大半が調査区より南側外にあたり、南北1間(3.0m)以上、東西1間(1.8m)以上で、建物主軸方位はN-58°-Eである。掘立柱建物を構成



第23図 SD04平面・断面図（縮尺1/60）



第24図 SB01平面・断面図（縮尺1/60）



第25図 試掘第4トレンチ平面図（縮尺1/200）同SD平面・断面図（縮尺1/60）  
同SDおよび付近出土遺物実測図（縮尺1/4）

する柱穴は、直径 30 ~ 40cm の不整な円形を呈し、埋土は灰褐色またはにぶい黄橙色のシルト質粘土である。柱穴から弥生土器細片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

#### 試掘第4トレチ S D (第 25 図)

試掘調査時の第4トレチで検出した溝である。幅 1m, 検出長 8m, 深さ 32cm を測る。方位は N - 37° - E で、溝底の標高は南側 19.17m, 北側で約 19.05m を測ることから、南西から北東に向かって傾いている。埋土は 4 層に分層でき、断面形状は浅い U 字形を呈している。第1層は、黒褐色シルト質粘土、第2層は黒褐色シルト、第3層は褐色細砂、第4層は黒色粘土である。

溝埋土中から 111 の瓦器柄が出土しており、鎌倉時代末～室町時代前半のものである。また、近くからは 112 の弥生時代後期の広口壺が出土している。

順位 番号	材種	底盤(g)		調査	色調	埋土	備考
		底盤	底盤				
1 1	弥生土器 壺	(7.0)	外底:ナゲ 内底:白	外底:にじむ灰7.5YR7/3 内底:灰褐色7.5YR7/2	1~3mm以下の石英・長石 を含む	検出し実地上に「L」字は鉄文字跡	
2 2	素面 壺	15.4	(2.8) 外底:白 内底:白	外底:白 内底:白	白		
3 3	無文 壺	13.6	(3.5) 外底:白 内底:白	外底:白 内底:灰5/4	灰		
4 4	無文 壺	—	(2.9) 外底:白 内底:白	外底:白 内底:白	白		
5 5	引手土器 壺	19.6	(10.4) 外底:白 内底:白	外底:灰褐色ため不規 内底:灰褐色ため不規	1mm以下の石英・1cmを多く含む 内底:灰褐色10YR7/2	検出し実地上に「L」字は鉄文字跡	
6 6	無文 壺	—	(3.6) 外底:白 内底:白	外底:灰褐色 内底:灰褐色	1mm以下の石英・長石 を含む	検出外周に「L」字は鉄文字跡 2層 へり足・生文	
7 7	弥生土器 壺	—	(7.2) 外底:白 内底:白	外底:ヘラガリナ 内底:灰	1~3mm以下の石英・長石 を多く含む	年輪外周に「L」字は鉄文字跡 へり足・生文	
8 8	弥生土器 壺	—	(10.7) 外底:白 内底:白	外底:灰褐色ため不規 内底:灰褐色ため不規	1mm以下の石英・1cmを含む 内底:灰褐色10YR7/2	検出外周に「L」字は鉄文字跡	
9 9	無文 壺	—	(14.4) 外底:白 内底:白	外底:白 内底:白	白	検出外周に「L」字は鉄文字跡	
10 10	弥生土器 壺	7.2	(1.9) 外底:白 内底:白	外底:白 内底:白	1~4mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	1~4mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	内底:黑斑
11 11	弥生土器 壺	7.0	(3.6) 外底:白 内底:白	外底:白 内底:ナゲ・灰ナゲ	1~4mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	1~3mmの石英・1cmを含む 内底:灰褐色10YR7/2	内底:黑斑
12 12	弥生土器 壺	8.0	(3.8) 外底:白 内底:白	外底:白 内底:白	1~4mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	1~4mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	内底:黑斑
13 13	弥生土器 壺	6.5	(6.9) 外底:白 内底:白	外底:ナゲ 内底:ナゲ	1~3mmの石英・1cmを含む 内底:灰褐色10YR7/2	1~3mmの石英・1cmを含む 内底:灰褐色10YR7/2	内底:黑斑
14 14	弥生土器 壺	6.9	(9.0) 外底:白 内底:白	外底:白 内底:ナゲ	1~4mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	1~4mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	内底:黑斑
15 15	弥生土器 壺	8.8	(7.0) 外底:白 内底:白	外底:白 内底:白	1~4mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	1~4mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	内底:黑斑
16 16	弥生土器 壺	9.8	(4.2) 外底:白 内底:白	外底:白 内底:白	1~4mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	1~4mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	内底:黑斑
17 17	弥生土器 壺	20.0	(2.8) 外底:白 内底:白	外底:白 内底:白	1~3mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	1~3mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	内底:黑斑
18 18	弥生土器 壺	—	(2.6) 外底:白 内底:白	外底:白 内底:白	1~3mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	1~3mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	内底:黑斑
19 19	弥生土器 壺	5.4	(4.5) 外底:白 内底:白	外底:白 内底:白	1~3mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	1~3mmの石英・長石を含む 内底:灰褐色10YR7/2	内底:黑斑

第1表 多肥宮尻遺跡出土遺物観察表①

遺物 番号	器種	高さ (cm)	幅さ (cm)	厚さ (cm)	調査		色調	地土	備考
					上部	下部			
20	鉢	9.6	8.7	7.6			青白	砂岩	重さ:1023.8g
21	打製石鏃	13.5	2.7	1.2			青白	サヌカイト	重さ:1.7g
22	打製石鏃	3.6	1.7	0.9			青白	サヌカイト	重さ:1.9g
23	打製刀刃	24.5	1.6	0.5			青白	サヌカイト	重さ:11.4g
24	骨手土器 広口器	18.0	(1.8)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
25	骨手一端 打製刀刃	14.9	(3.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
26	骨手土器	16.7	(1.3)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
27	骨手土器 広口器	8.0	(0.8)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
28	骨手土器 広口器	12.9	(0.6)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
29	骨手土器 広口器	13.6	(0.8)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
30	骨手土器 広口器	23.0	(6.6)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
31	骨手土器 広口器	13.2	(5.2)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
32	骨手土器 広口器	13.2	(5.2)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青, ナナフジ, 開溝状 態	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
33	骨手土器	12.8	(2.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
34	骨手土器 広口器	10.5	(2.1)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
35	骨手土器	10.8	(1.7)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
36	骨手土器 広口器	10.0	(7.4)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
37	骨手土器 広口器	3.6	(3.7)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
38	骨手土器 広口器	3.6	(2.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
39	骨手土器 広口器	3.6	(2.2)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:ナダ	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
40	骨手土器 広口器	5.2	(4.8)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
41	骨手土器 広口器	6.4	(6.5)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:ナダ	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
42	骨手土器 広口器	8.0	(3.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:ナダ	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
43	骨手土器 広口器	5.2	(2.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:ナダ	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
44	骨手土器 広口器	5.9	(2.3)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:ナダ	骨質下の石質:長石+角 石を含む。
45	鉢	10.3	16.1	5.4			青白	上部に断続的見られる	少部分
46	打製石工具	2.8		0.5			青白		重さ:991.8g
47	打製石工具	9.2	1.6	1.2			青白		重さ:26.0g
48	打製石工具	4.5		0.5			青白		重さ:61.3g
49	骨手土器	12.0	(5.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
50	骨手土器	20.4	(5.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
51	骨手土器	21.8	(10.5)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
52	骨手土器 広口器	10.2	(15.1)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
53	骨手土器	5.7	(3.7)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
54	骨手土器	3.6	(5.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
55	骨手土器	6.3	(7.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
56	骨手土器 広口器	5.8	(7.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
57	骨手土器 広口器	8.8	(6.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
58	骨手土器	28.9	(5.7)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
59	骨手土器	18.4	(4.1)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
60	骨手土器 広口器	15.2	(6.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
61	骨手土器 広口器	16.8	(3.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:ナダ, 開溝状	サヌカイト
62	骨手土器	20.9	(7.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
63	骨手土器	19.0	(10.2)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
64	骨手土器 広口器	16.4	(3.0)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:ナダ	サヌカイト
65	骨手土器 広口器	18.2	(8.2)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:薄青	サヌカイト
66	骨手土器 広口器	13.7	(3.7)	1.2			青白	骨質のため不明 内面:ナダ	サヌカイト

第2表 多肥宮尻遺跡出土遺物観察表(2)

遺物 名稱	器種	出土地 名	出土地 位置	測量 距離	調査	色 痕	灰 土	備 名
柳生土器 灰	杯	6.2	(11.6)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	外周: 黑鐵	
柳生土器 灰	碗	8.4	(26.2)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	体外外壁: ハラガキ灰文2条 体外外壁: 黑鐵	
柳生土器 灰	盆	13.0	(26.2)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/3 内面: にじ・滑面 10786/5	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	体外外壁: 黑鐵	
柳生土器 灰	盆	5.8	(6.4)	外周: ハラガキ、内面: ナナ・滑面	外周: 黒灰 10786/3 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	外周: 黑鐵	
柳生土器 灰	盆	7.1	(7.1)	外周: ハラガキ、内面: ナナ・滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	外周: 黑鐵	
柳生土器 灰	20.4	6.8	(23.3)	外周: ハラガキ、内面: ナナ・滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	口縁端部: 刃口式 体外外壁: ハラガキ灰文2条 体外外壁: 刃口式	
柳生土器 灰	22.2		(19.5)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	体外外壁: 刃口式灰文2条	
柳生土器 灰	19.6		(12.3)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	体外外壁: 刃口式灰文2条	
柳生土器 灰	21.8		(12.1)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/1	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	外周: 黑鐵	
柳生土器 灰	23.3		(9.6)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/2	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	
柳生土器 灰	17.7		(4.7)	外周: ハラガキ、内面: ナナ・滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	体外外壁: ハラガキ灰文10条以上	
柳生土器 灰	14.0		(4.0)	外周: ハラガキ、内面: ナナ・滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	体外外壁: ハラガキ灰文2条 内周: 黑鐵	
柳生土器 灰	17.0		(5.0)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	体外外壁: ハラガキ灰文2条	
柳生土器 灰	20.0		(3.3)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	体外外壁: ハラガキ灰文3条以上	
柳生土器 灰	14.0		(4.0)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	体外外壁: ハラガキ灰文4条以上	
柳生土器 灰	16.5		(6.5)	外周: ハラガキ、内面: ナナ・滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/1	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	体外外壁: ハラガキ灰文4条	
柳生土器 灰	5.7		(7.0)	外周: ハラガキ、内面: ナナ・滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	外周: 黑鐵	
柳生土器 灰	6.7		(3.9)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
柳生土器 灰	7.8		(2.1)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	外周: 黑鐵	
柳生土器 灰	8.0		(6.1)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/1	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	外周: 黑鐵	
柳生土器 灰	8.4		(5.7)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/1	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	外周: 黑鐵	
柳生土器 灰	9.0		(3.9)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/2	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	外周: 黑鐵	
柳生土器 灰	9.2		(3.8)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	外周: 黑鐵	
柳生土器 灰	9.5		(10.0)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
柳生土器 灰	10.2		(8.1)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
柳生土器 灰	10.8		(3.3)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/3	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
柳生土器 灰	13.2		(4.5)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/2	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
柳生土器 灰	12.6		(3.8)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/2	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
内壇	盆	9.5	(1.7)	外周: ハラガキ、内面: ナナ・滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
内壇	14.0		(4.1)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	体外外壁: ハラガキ灰文2条	
内壇	2.8		(4.4)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
内壇	15.0		(5.0)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/2	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	体外外壁: ハラガキ灰文2条	
内壇	26.8		(5.3)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
内壇	6.4		(7.0)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
内壇	12.7		(5.7)	外周: ハラガキ、内面: ナナ・滑面	外周: 黒灰 10786/1 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
内壇	6.8		(23.0)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/2	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	内周: 黑鐵
内壇	22.0		(2.3)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	内周: 黑鐵
内壇	7.2		(4.4)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
内壇	7.6		(6.6)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
内壇	22.4		(6.0)	外周: ハラガキ、内面: 滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
内壇	14.4		(5.0)	外周: ハラガキ、内面: ナナ・滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	
内壇	14.7		(5.9)	外周: ハラガキ、内面: ナナ・滑面	外周: 黒灰 10786/2 内面: にじ・滑面 10786/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	内周: 黑鐵	

第3表 多肥宮房遺跡出土遺物観察表③

## 第4章 まとめ

### 第1節 遺構の変遷について

今回の調査は部分的に限られたものであり、不明な点が多いが、溝5条、掘立柱建物跡1棟を検出し、弥生時代前期末から室町時代までの遺物がコンテナ6箱分出土した。概ね弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代後期、奈良時代、鎌倉～室町時代の4時期に大別できる。以下に、各時期の概要を記すものである。

#### 【弥生時代前期末～中期初頭】

確実なものとしてはSD02・03があり、可能性があるものとしてSD01がある。これら溝は、調査地西隣を南西から北東方向に流れる旧河道にほぼ沿っており、上流において川から取り入れた水を下流の施設（水田？）に流す目的に掘削された可能性がある。環濠の可能性については、調査地東隣が低地となっていることや、後述する周辺遺跡の状況を勘案すると、現段階では考えられない。

#### 【弥生時代後期】

SD01が当該期に掘削された可能性がある。さらに、SD02・03最終埋没土層において、当該期の土器が出土している。このSD02では投棄された礫群が認められ、土地の安定化を図っていることが想定され、居住空間であった可能性もある。この場合、掘立柱建物跡SB01の存在やSD04が竪穴住居の壁溝である可能性も指摘できるが、これら遺構の所属時期が明確でないことから不明である。

#### 【奈良時代】

SD01埋没土層より、当該期の土器が出土しているが、SD01が機能していたかどうかは不明である。

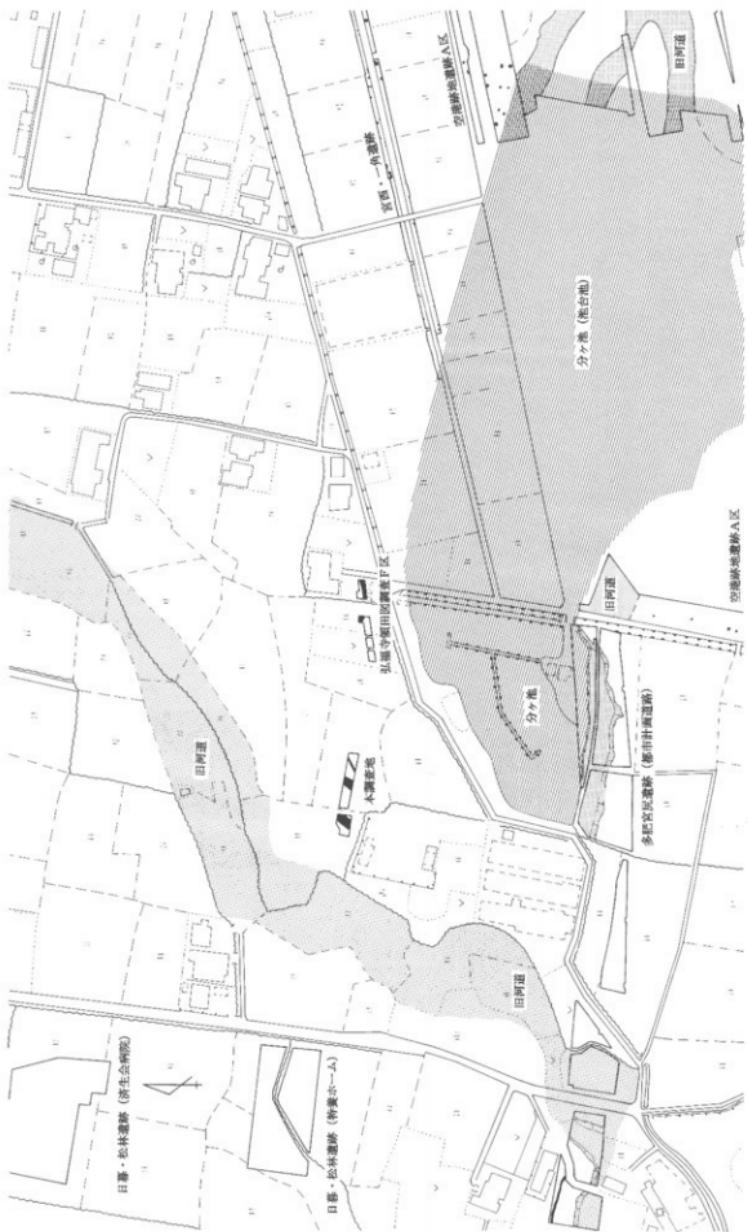
#### 【鎌倉～室町時代】

試掘第4トレチSDから、当該期の土器が出土している。

### 第2節 調査地周辺における弥生時代前期末～中期初頭の遺跡との関係

本調査地周辺で行われた発掘調査では、SD01～03と同じ弥生時代前期末～中期初頭の遺構が確認されている。本節では、旧地形と前期末～中期初頭の遺構について報告し、まとめたい。

第26図に示すとおり、本調査地西隣に南西から北東方向に流れる旧河道が存在する。この旧河道は、幅約25～45mの大きなもので、旧香東川の一つである。一方、分ヶ池はもと池台池と呼ばれ、埋め立て以前は大きな池であり、分ヶ池内にも東西方向の旧河道が存在していたことが発掘調査で明らかになっている。この両者の旧河道に挟まれた地域には、幾つかの微高地が存在すると考えられ、微高地上に前期末～中期初頭の遺構が認められる。この地域の西側にあたる本調査地および弘福寺領田園調査F区では灌漑用の溝が認められ、東側にあたる宮西・一角遺跡および空港跡地遺跡A区では多くの土坑が見つかっている。この土坑群を集合に伴うものとすると、東側の地に最大径180m規模の集落が広がっていたと推定される。また、弘福寺領田園調査F区と宮西・一角遺跡の間には、小規模な旧河道が存在するのかどうかが今後の課題である。いずれにしろ、この地域には前期末～中期初頭において、大規模な集落または集落群が存在し、広範囲において土地を占有していたと考えられる。なお、多肥宮尻遺跡（都市計画道路）でも、前期末～中期初頭の溝を検出しているが、本調査地との間に大きな旧河道が存在することから、別集落のものと考えられる。同様に、分ヶ池の旧河道南側にも前期末～中期初頭の竪穴住居と土坑群を検出しており、別集落である。これから発掘調査が進展すれば、さらに広い範囲における集落および水田等の配置や土地利用が明らかになることを期待するものである。



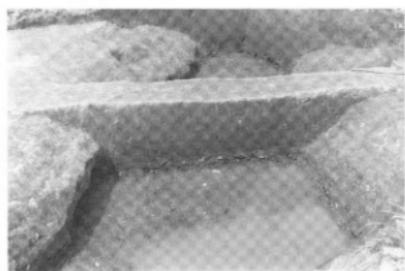
第26図 多忙宮尾遺跡周辺の旧地形と弥生時代前期末～中期初頭の遺構配置図(縮尺1/2,500、香川県埋文センター2002「空港跡地遺跡V」の一部を利用)  
(各遺跡調査区内の黒塗りが弥生時代前期末～中期初頭の遺構)



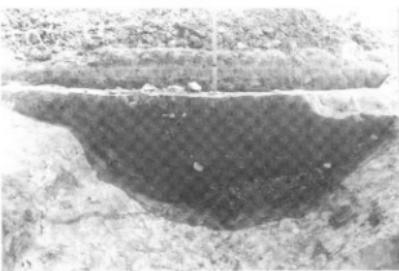
1 西側調査区全景（北から）



5 S D O 2上層疊群検出状況（南西から）



2 S D O 1断面（南西から）



6 S D O 2断面（北東から）



3 S D O 1完掘状況（南西から）



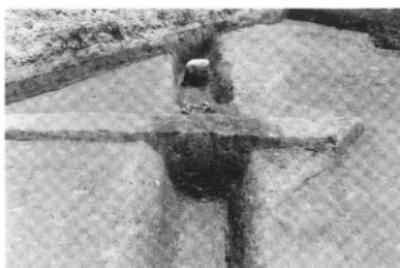
7 S D O 2遺物出土状況（東から）



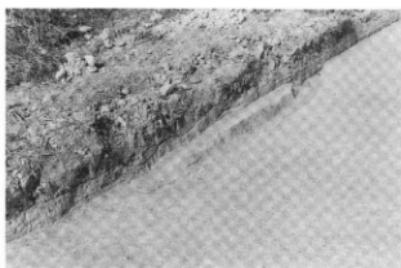
4 東側調査区全景（東から）



8 S D O 2完掘状況（南西から）



1 SD03断面（南西から）



5 SD04完掘状況（南西から）



2 SD01遺物出土状況（南西から）



6 SB01完掘状況（南東から）



3 SD03完掘状況（南西から）



7 試掘第4トレンチSD完掘状況（北から）



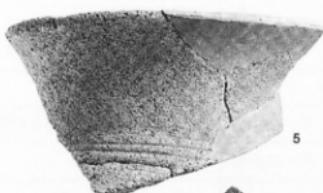
4 SD04断面（東から）



8 試掘第4トレンチSD断面（北から）



72



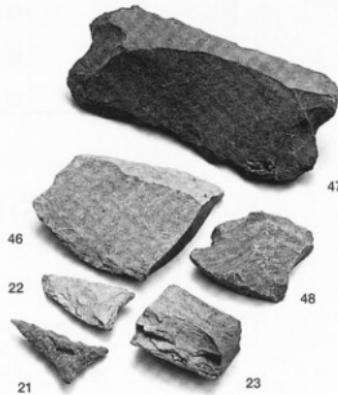
5



7



73



46

22

21

47

48

23

## 報告書抄録

ふりがな	たひみやじりいせき						
書名	多肥宮尻遺跡						
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第78集						
編著者名	川畠聰、小川賢						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2636						
発行年月日	西暦2004年12月28日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
たひみやじりいせき 多肥宮尻遺跡	香川県 高松市 多肥上町	37201	34° 17' 27"	134° 03' 45"	2004.7.5~16	205 m <sup>2</sup>	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
多肥宮尻遺跡	集落	弥生前期	溝	弥生土器、石器			
		弥生後期	溝 包含層	弥生土器			
	古代	溝	須恵器				
		中世	溝	瓦器			

### 多肥宮尻遺跡

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年12月28日

編集 高松市教育委員会  
 高松市番町一丁目8番15号  
 発行 高松市教育委員会  
 株式会社西日本住建  
 印刷 有限会社中央ファイリング